

【「復興とは」報告フォーマット】

1. あるべき「復興」とは何か、あなたはどのように考えますか。
現場で活動している時には、「復興とは？」と考える訳ではないが、敢えて「復興とは？」について述べると、――災害後における「暮らしの再建」過程において、あらゆる関わりを通して、「語り出す」「学ぶ」「つながる」「つくる」「決める」を積極的に感じつつ、市民主体の市民社会を創造する力を養い、育くみ、もう一つの社会を築く営みを復興と言いたい。もう一つの社会を築くには、大胆な価値観の転換をも恐れないものが求められる。 (もう一つの社会とは、私が主張する減災サイクル論におけるもう一つの社会である。)
2. あなたの復興観におけるキーワード（最大 10 個前後）
地域分権、地域自立の経済、自然との共生、文化の尊重、ボランタリー経済、価値観の転換、支えあい・学びあい、もう一つの社会、十人十色
3. あなたがそのような復興観を持つに至った背景について
<p>* 阪神・淡路大震災で、すべての人平等→最後の一人までを救うという価値観の転換の必要性に気づいた。</p> <p>* ボランティアが十人十色だから、同じく十人十色の被災者に対応できた。人間は十人十色であり、多様だという原理にあらためて気づかされた。</p> <p>* この 14 年間いろいろなことを考えてきた。その中で、最後の一人までという価値観の転換が起こったという現実から、あの時を振り返ると、私たちが活動してきたフィールドのボランティアが寄り添ってきた相手の被災者との関係は、行政が被災者に対するマスケアーではなく、まさに「たった一人のための」ボランティアケアであったことを確認することが多々できた。→コミュニティ・ケアへの移行を追求しなければならない。</p> <p>* 『復興まちづくりの評価手法に関する共同研究・最終報告書』（2009・3、国連地域開発センター作成）に一部記述されているように、阪神・淡路大震災から 12 年経過した頃、あらためて 12 年前を振り返って考えて見ると、これが復興か？首を傾げるような事実が出てくる。→開発という言葉の欺瞞性。</p> <p>* 遺族の方々にとっては、あれから 14 年経っても「思い出したくない。」とか「忘れられない」とか「まだ亡くなったことを現実として受け止められない」という感情を大事にしている。支援の側は、それをも受け止めながら、これからも歩み続けなければならない。</p> <p>* この 14 年間、「いのちの大切さ」について考え続けてきた。寺田寅彦はじめ、災害といえば方丈記の「無常観」を引用するケースも少なくないが、あらためて「いのちと宗教」について考えることの必要性を感じてきた。減災サイクルにおける自然との共生を追求していると、自然にそこにつながるのではないかと思う。</p> <p>* 『災害と文化』で大江健三郎さんたちが言った、「人間には回復力がある。」ということを確認しつつ、暮らしの再建過程で被災者に必要なエンパワーメントはどこから湧き出てくるのか？それは、他者との関係性とそれらによる自己の内面のエネルギーの中から生まれてくるものだと思う。</p> <p>* 海外の被災地から学ぶことも多く、支えあい、学びあいという共同作業が、災害後の「暮らし再建」には不可欠であること。→受援力も生まれる。災害時における要援護者の援護も片方通行はあり得ない。例えば障害者であっても、支援をする側に立つことができる。</p>

4. 上記を理解する上で参考となる文献

- * 『市民がつくる復興計画－私たちにできること－』（市民とNGOの「防災」国際フォーラム実行委員会編、神戸新聞総合出版センター、1998/7/17 発行）
- * 『ボランティアが社会を変える』（似田貝香門編著、柳田邦男・黒田裕子・大賀重太郎・村井雅清共著、関西看護出版、2006/3/31 発行）
- * 『現代社会を読む経営学 第10巻 NPOと社会的企業の経営学 －第10章 災害とボランティア活動』（馬頭忠治・藤原隆信編著、村井雅清第10章執筆、ミネルヴァ書房、2009/5.末 発行予定）
- * 『災害ボランティア論入門』（菅磨志保・山下祐介・渥美公秀編著、弘文堂、2008/12/15 発行）
- * 『<支援>の社会学－現場に向き合う思考－』（崎山治男・伊藤智樹・佐藤 恵・三井さよ編著、青弓社、2008/11/22 発行）
- * 『地域自立の経済学－第2版』（中村尚司著、日本評論社、1993/2/10 第一刷発行）